展望的記憶課題遂行時の無意図的想起の規定因

森田 泰介

(東京理科大学理学部第二部)

キーワード: 無意図的想起, 展望的記憶課題, 保持期間

Determinants of involuntary remembering in a prospective memory task

Taisuke Morita

(Faculty of Science, Division II, Tokyo University of Science)

Key words: Involuntary remembering, prospective memory tasks, retention interval

目 的

未来において行うべきことを記憶し、それを適切な時機に想起・実行することが求められる課題を展望的記憶課題と呼ぶ。日常場面の展望的記憶課題において、我々はしばしば無意図的想起を経験する。無意図的想起とは、思い出そうとしていないにもかかわらず記憶がふと想起されてくる現象のことである(小谷津・鈴木・大村,1992)。展望的記憶課題遂行時に経験される無意図的想起は、展望的記憶課題の遂行に影響を及ぼす可能性があり(e.g., Sellen et al.,1997)、その生起メカニズムを解明することは、展望的記憶課題遂行時の認知過程について明らかにするために重要な意味を持つ。本研究では、展望的記憶課題遂行時に経験される無意図的想起の規定因を明らかにすることを目的として、方向づけ課題の処理の種類と刺激の種類を操作することが無意図的想起の頻度に及ぼす影響につき検討を加える。

方 法

実験計画 2(処理の種類:意味,形態)×2(熟知価:高,低)の2要因混合計画であり,前者の要因は参加者間計画,後者の要因は参加者内計画であった。

実験参加者 大学生52名(男性36名,女性16名,平均年齢21歳)を意味処理条件(23人)と形態処理条件(29人)に無作為に振り分けた。

刺激 方向づけ課題の刺激として、ひらがな清音5文字名詞の熟知価表(藤田・齋藤・高橋,1991)より180項目を抽出した。180項目のうち、熟知価3.01-3.50の72項目(e.g., あしならし、うたあわせ)を熟知価低条件の刺激、熟知価4.01-5.00の72項目(e.g., すききらい、あれもよう)を熟知価高条件の刺激とした。また、練習試行用の刺激と最終試行用の刺激として、熟知価3.01-3.50の項目と熟知価4.01-5.00の項目をそれぞれ9項目ずつ、計18項目ずつ選出した。

課題 意味処理条件での方向づけ課題は、呈示された単語が一般に使われているかどうかを判断するものであり、形態処理条件での方向づけ課題は、呈示された単語を構成する文字列中に囲まれた部分が2箇所以上あるかどうかを判断するものであった。いずれの条件でも、選択肢は“はい”か“いいえ”であった。展望的記憶課題は、本試行の開始から11分が経過したら、その時に回答している項目の番号に丸印をつけるという時間ベース課題であった。

手続き 小冊子による集団実験であった。方向づけ課題・展望的記憶課題について教示を行った後、本試行中に何度か実験者が方向づけ課題を停止させ、停止の直前に意識していた内容について報告を求める旨を予告した。次に、練習試行を1試行実施し、不明点がないことを確認してから本試行を開始した。各試行では1枚の紙に縦に印刷された18項目の刺激について、実験者が発する合図に従って、1項目につき5秒のペースで評定が進められた。各試行の開始から平均60秒(範囲:52~68秒)が経過した時に、実験者は評定を中止

させ、冊子の第1ページに記載されている停止の直前に意識していた内容についての質問文に20秒以内に答えるよう求めた。質問文は、“止めてくださいと言われた時の一瞬前に頭にあったことは、以下のうちのいずれのものですか”というもので、質問の選択肢には、“評定課題に関係すること”、“時間チェック課題に関係すること”、“課題に関係のない未来の予定の記憶”、“課題に関係のない過去の出来事の記憶”、“課題に関係のないイメージ・言葉など”、“その他”、“なし”という7項目があり、参加者は選択肢のうち当てはまるもの全てに丸印をつけた。20秒が経過すると実験者は意識内容に関する評定を停止させ、ただちに次の試行に移るように求めた。各試行に要した時間は意識内容に関する報告を含めると約80秒であり、展望的記憶課題の実行時期は、第9試行の方向づけ課題開始後20秒の時点で位置していた。

結 果

展望的記憶課題成績 意味処理条件と形態処理条件における課題成功者の全体に占める割合はそれぞれ87%,86%であり、条件間で有意な差は見られなかった($\chi^2(1)=0.01, p>.10$)。

展望的記憶課題の無意図的想起 本試行開始後11分が経過したら丸印をつけるという展望的記憶課題が無意図的に想起されたと報告された試行数について、2(処理の種類:意味,形態)×2(熟知価:高,低)の分散分析を行ったところ、いずれの主効果も交互作用も見られなかった(all $ps>.10$)。

未来の予定・過去の記憶の無意図的想起 課題に関係のない未来の予定の記憶が無意図的に想起されたと報告された試行数について、2(処理の種類:意味,形態)×2(熟知価:高,低)の分散分析を行ったところ、交互作用のみが有意であった($F(1,43)=4.25, p<.05$)。下位検定の結果、低熟知価条件においてのみ、処理の効果が有意であり($F(1,43)=5.25, p<.05$)、意味処理条件($M=0.10, SE=0.07$)のほうが形態処理条件($M=0.52, SE=0.15$)よりも無意図的想起が報告される試行数が少なかったのに対して、高熟知価条件においては処理の効果は有意ではなかった(それぞれ、 $M=0.30, SE=0.10$; $M=0.36, SE=0.12$; $p>.10$)。過去の記憶の無意図的想起が報告された試行数について同様の分析を行ったところ、主効果・交互作用とも有意ではなかった(all $ps>.10$)。

考 察

未来の予定の記憶が無意図的想起された試行数が、低熟知価条件では、意味処理条件よりも形態処理条件のほうが多かったのに対して、高熟知価条件ではそのような差が有意ではなかった結果は次のように解釈できるだろう。もし無意図的想起が処理資源を必要とする制御的な過程を含むと仮定するならば、熟知価が低く、意味的な判断が容易ではない刺激に対して意味的な処理をする場合には、意味的な判断を必要としない形態的な処理をする場合よりも、多くの処理資源が必要となったため、無意図的想起のための処理資源が不足し、無意図的想起が生じにくくなったものと考えられる。